三重大学 海女研究センターだより vol.1

三重大学海女研究センター
(三重大学人文学部総務担当)
☎059-231-6991

三重大学 海女研究センターの活動を紹介します！

みなさん、こんにちは。三重大学海女研究センターです。本センターは三重大学の地域拠点のひとつとして、平成30年3月、鳥羽市立海の博物館内に設立されました。伝統的な海女漁の歴史や、現代の海女漁と観光振興との関係、海女漁村の景観の特徴など、さまざまな研究を行っています。

海の博物館ギャラリー棟・海女研究センター

国の重要無形民俗文化財に指定され、日本農業遺産、日本遺産にも認定された海女文化を、ユネスコの無形文化遺産に登録するための学術的な研究も目指しています。

最も基礎となる活動が海女アーカイブデータベース構築事業であり、海女に関する本や論文、古い映像や写真を集めて保存する作業です。

海の博物館は約半世紀前の開館以来、調査や展示のために、漁村の様相を多数の写真に記録してきました。それが今では、世界のどこにもない、古い海女漁の様子を示す貴重な資料となっています。それらをデジタル化して保全を図るとともに、内容を精査し、目録の作成を進めています。

成果の一部は今年初めに海の博物館のギャラリー棟で展示し、また国崎公民館でも写真展を開き、若い学生たちと共に写真を見ながら、地元のかたがたに昔のお話を伺うワークショップを開催しました。その成果は報告書にまとめています。

国崎公民館での写真展の様子

今年度は石鏡町を舞台に、写真展と聞き取り調査を実施する予定です。同時にみなさんがお持ちの古い写真を調査させていただきたいと願っています。

毎年好評を頂いている海女学講座は、今年は11月から6回にわたって開催します（くわしくは12ページに掲載）。例年、歴史や社会、水産の分野からのテーマをそろえていますが、今年は文学や芸術の分野を加えて、さまざまな観点から海女の魅力に迫ります。興味深い講演ばかりですので、ぜひ参加してください。

今後も随時海女研究センターの活動を紹介していきますので、どうぞご注目ください！

鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の海藻博物記 vol.14

～ツノマタの話～

水産研究所 ☎㉕3316

ツノマタは紅藻類の海藻で、日本中の磯で潮がよく引くと干上がってくるような場所に生えており、磯歩きをしたことのある人なら視界には入っているはずの海藻である。漢字では角又と書き、形も「言われてみれば海藻ってそんな形のものもあるよな」というようなオーソドックスな二又分枝をした平たい形をしている。色は紅藻なので、紅色や赤色だと言いたいところだが、生えている深さや日当たりなどによってガラッとかわり、緑、黄、黄緑、オレンジ、赤紫など変化に富んでいる。僕が好きな海藻の一つだ。なぜ好きなのか理由はわからない。ただ、ひと目見た時から惹きつけられたのだから仕方がない。

このツノマタは、鳥羽市では食べられてはいないが、千葉県や茨城県などの一部地域では煮溶かしたものをこんにゃくのように固めて食べられている。そのほかには漢方薬としても用いられることもあるが、最も有名な利用法は漆喰の糊料である。漆喰における糊料というのは、いわゆる糊として接着力を期待されているのではなく、塗り広げたりする際に乾燥ですぐに固まらないようにするための水分保持の役割を果たしている。その糊料としてツノマタを煮溶かして用いる。最近では「粉角又」という製品や「化学糊」もあるようだ。鳥羽でも食用にされるフノリもこの漆喰の糊料として使われるのだが、高価なため、やはりツノマタが主流なのだろう。

ちなみに、用途も同じで見た目もほぼ同じ海藻にイボツノマタというものがあり、これまた同じようなところに生えているが、その話はまた別の機会に。

ツノマタ
オリーブ色のガラス細工やゴムのような外観

磯に生えるツノマタ
紅藻らしい濃い紅色をしている